



藝人譚

左東柳水編

初代 桐竹紋十郎の談話 (四)

私は何時も始終此様なことをいふので仲間同志から餘り能く云はれませんが、能い法は残して置ても改良すべきことはズン／＼改良しなければ益々斯道は衰へるだらうと思ひまして切めては私一人だけでもまあ遣てる積です。

御覽なさい今でも普通の芝居で能く人形振といふのを遣ります、まあ狐火とかお七の櫓、お染の藏、梅忠の羽織落し、日高島の景清なんぞが重ですな、けれども人形遣が平常妙な仕打ばかりを見せて置くものですから首と手足をガタ／＼させたり畢竟人形のあらばかりを好んでやつて見せる様な傾があつて、これでは不自由な所を廣告される様なものですな。シタガ名人は違つたもので、先年東京の市村座で有名な阪東

彦三郎が忠臣藏の七ツ目に平右衛門を人形振で遣つた事がありました、掛腹と云つて人形がソレ首の所を隠してあるものですが、それを用ゐたりまた捌手なんぞまで擬て遣りましたが流石に古今の名人と云れる位ですから其様な、あらなんぞを遣らずに如何にも人形かといふ所を見せました、私も感心して、なる程人形振ならば此位に遣て欲しいものだと思つて居ました、夫とは往方は違ひますけれども、其阪彦の親者人で阪東龜藏といふ人が市村座の座頭で随か六七十年前と思ひましたよ、矢張り忠臣藏を出した事があつたさうです、スルト役割の都合で龜藏の役がありません、オヤ旦那（此頃は役者の内でも旦那様がありました）の役がないといふと龜藏は、イヤ已は座頭だから別に役は入らぬ、夫でも旦那の役がないと人氣に障りますと言ふと、左様ならば已が口上を述べて遣うと序幕鶴ヶ岡の場の幕明に人形振で口上を云ひました、イチ番は何々ど今でも其形が残つて遣ることがあります、彼れです、スルト其人形の口上が面白い序幕を見落してはならんと云て古今の大入を占めました是なんぞはまア機轉ですな、人形を旨く利用したといふものです。

凡て此の舞臺に上つて藝を演ずるに就ては只の芝居と我々とに論なく其狂言の筋といふ事を充分腹に入て遣なければ何も御見物に情が映りません様に私は考へます、事に依りますと狂言作者から書拔を貰ひ全體の筋がどんなだか分らずに臺

詞を云ひさへすればよい、我々人形座なら古人の残した形さへ遣て居れば良いと滅茶々々に舞臺を勤める人が當今でも随分ある様ですが、彼では到底ものになりません、私の様なものでも死んだ雀右衛門さんや瑠寛さん、夫に多見之助さん、巖笑さんなども時々藝に就て御相談に來られますが古人の方は彼々が形ばかりで腹がなかつた日にはカラー洞見た様なもので精神がないからいけません、其精神はと云て聞れると夫は嘶が出来ませんから文樂へ御出なすつて見て下さいと云て遣ます、自體私は女形ではありませんでした然し前お嘶しました通り陸奥大様の息子で三代目西川伊三郎といふ女形の名人に就て秘訣を會得しましたので、左様明治九年でした、御當地の竹田の芝居へ前師匠の吉田辰造から招かれまして参りますと其途中で同座は火災に罹つたといふ事で今度は文樂座へ出る事になりました、其時役の都合で一谷の相模を演りますと仕合せにも大評判になりました、夫から御承知の如く女形専門で今日まで勤めて居る様な次第ですが、随分是迄も女形では苦勞をしましたよ、此節でも別に楽しみと云てはありませんから中の島公園を散歩しても始終女の足取りや身の動作などに目を付て獨り修行をして居ますが憎中々至りがたいものです、是に就ても左様明治十六年頃でもありましたらう、面白いことがありましたよ、恰中道頓堀を歩いて居ますと不圖目に付たは年頃十八九の婦人、容貌も中々好れて居

りますが、其身體の柔軟なことにいふものはまア有りませんね、何様大家の嬢さんでもありましたらう、下女を一人連れて歩く風情が堪りません、斯いふのを一つ標本に生捕るのだと考へましたから傍目も觸ず其動作を見詰ながら付て行きまして、我橋を北へ渡つて北へ〱と行き或善哉屋へ遣入ました、ハテ大家の嬢さんにしては妙な所へ遣入るものと不審には考へましたが、私も逃してはならんと同じく其所へ遣入ました、向ふでも善哉を誂へましたが別に喰るでもありませんで下女と何やら囁きました末、代價を拂つて出て行きますから私も慌てゝ又跡を尾けやうとすると後から背中をポンと叩いて紋十郎さん、好年をして相變らずのろいものだなと云ふ人があるから驚いて見ると、豫て最負になる其旦那さんです、是はと云んで聞て見ますと其嬢さんは餘り跡を尾けるものだから私を巾着切と見て止むを得ず汁粉屋へ飛込だのだとの事で、下女に囁やいて居たのは夫なんだそうです、はゝあだから汁粉を喰なかつたのか實は是々ですと嘶をして大笑をした事がありました。……はゞ成程大夫さんに就て……、夫は大夫さんの巧拙に依て我々は大きに違ふ事がありますよ、先の住大夫さんの中々甘うございましたが、今の越路さん、並ぶ者なき名普で彼の人に語つて貰ひますと人形も大變に引立て遣はれますな、何しろ彼の通り息の長い人ですからまア彼の人が文樂を引く様な事があれば私もやる積りでございますよ。(終)——次は豊澤團平を……編者——